

令和元年度病害虫発生予察情報

特殊報第3号

令和元年12月10日

発表：福島県病害虫防除所

TSWVによるキュウリの病害について

病原ウイルス：トマト黄化えそウイルス（TSWV）学名：*Tomato spotted wilt tospovirus*
作物名：キュウリ

1 経緯

令和元年6月に県北地方の施設および露地栽培キュウリにおいて、葉に斑点性のえそ症状を伴うウイルス様症状が確認された（写真1～2）。病害虫防除所で現地を調査し、イムノクロマト法による簡易検定を実施したところトマト黄化えそウイルス（TSWV）が陽性を示した。このため秋田県立大学の藤晋一教授に同定を依頼したところ、塩基配列の解析により、トマト黄化えそウイルス（TSWV）であることが確認された。本病の発生状況を調査した結果、当該ほ場および近隣の数ほ場でのみ発生が確認されており、現在のところ地域的な広がりには確認されていない。

本ウイルスは、トマト、ピーマンなどのナス科、キク、ダリアなどのキク科ほか、多くの植物で発生が確認されているが、過去に本邦ではキュウリ等ウリ科での発生報告はない。

2 病徴

発病初期は葉に小斑点を生じ、えそ斑点症状を示す（写真1～3）。さらに病勢が進展すると萎凋枯死する株も見られる。症状は葉でのみ現れ、茎や果実では確認されていない。

3 伝染方法

一般にTSWVは、アザミウマ類（ミカンキイロアザミウマ、ヒラズハナアザミウマなど）が幼虫期にウイルスを獲得し成虫でウイルス伝搬する。ウイルスを獲得したアザミウマは永続伝搬し、経卵伝染はしない。また、種子伝染や土壌伝染、通常の管理作業による汁液伝染はない。

4 宿主範囲

野菜や花きを中心に、ナス科（トマト、ナス、ピーマン）、アカザ科（ハウレンソウ）、キク科（レタス、キク、ダリア）、リンドウ科（トルコギキョウ）など900種以上の植物に感染することが報告されている。

5 防除対策

- （1）媒介昆虫であるアザミウマ類の防除を徹底する。定植時の薬剤施用に加え、葉での被害痕の発生をよく観察し、発生初期に薬剤防除を行う（表1）。
- （2）アザミウマ類の薬剤抵抗性の発達を防止するため、系統の異なる薬剤によるローテーション散布を行う。
- （3）発病した株は伝染源となるため速やかに抜き取り、ほ場外で埋設するなど適切に処分する。
- （4）施設栽培では施設内への侵入防止のため、開口部に1mm目合い以下の防虫ネットを設置するよう努める。
- （5）アザミウマ類の寄主範囲および本ウイルス（TSWV）の宿主範囲は広いため、栽培に関係のない植物はほ場内へ持ち込まない。また、ほ場内外の除草を徹底して、アザミウマ類の生息場所をなくす。

●情報内容への質問や要望は、福島県病害虫防除所（農業総合センター安全農業推進部）
次長 草野まで御連絡ください。

TEL 024-958-1707 FAX 024-958-1727



写真1：罹病葉



写真2：被害株の全身症状



写真3：接種試験によるキュウリ幼苗での症状
(写真3は秋田県立大学より提供)

表1 キュウリのアザミウマ類防除に使用できる主な農薬（令和元年12月1日現在）

薬剤名	希釈倍数・使用量	使用方法	使用時期	有効成分	IRAC コード
アドマイヤー1粒剤	1～2g/株	植穴又は株元 土壌混和	定植時	イミダクロプリド	4A
アルバリン粒剤	2g/株	植穴土壌混和	定植時	ジノテフラン	4A
スタークル粒剤	2g/株	植穴土壌混和	定植時	ジノテフラン	4A
ブリロッソ粒剤	2g/株	株元散布	育苗期後半～定植時	シアントラニプロール	28
ベリマーク SC	400倍 25ml/株 又は 800倍 50ml/株	灌注	育苗期後半～定植当 日	シアントラニプロール	28
スミチオン乳剤	1000倍	散布	収穫前日まで	MEP	1B
アドマイヤー顆粒水和剤	5000～10000倍	散布	収穫前日まで	イミダクロプリド	4A
モスピラン顆粒水溶剤	2000～4000倍	散布	収穫前日まで	アセタミプリド	4A
スピノエース顆粒水和剤	5000倍	散布	収穫前日まで	スピノサド	5
モベントフロアブル	2000倍	散布	収穫前日まで	スピロテトラマト	23

